

患者さんに
役立つちょっと
いい話

相澤病院
医療連携
かわら版

2021.5 NO. 7



今回はワクチン接種
の様々な疑問にお答
えします。

新型コロナウイルス感染症の予防接種を安心して受けるために

ワクチンについてわからないことや、高齢者や基礎疾患をお持ちなど、接種に不安がある方は、かかりつけ医や地域の医療機関にぜひご相談下さい。

Q1 なぜワクチンを接種するのですか？

A1 ワクチンの接種により、症状が出ることを防ぎ、重症化するのを予防できることが明らかになっています。最近の研究では、感染自体を防げる可能性も示されています。

Q3 接種するワクチンはどのくらい効き目(効果がありますか)？

A3 3週間の間隔で2回接種した場合、2回目の接種から7日目以降において、症状がでることを防ぐ効果は約95%でした。ワクチンを定められた方法(間隔、回数)で接種した場合の効果は科学的に明かです。

Q2 ワクチンを接種した方が良いですか？

A2 できるだけ多くの方が予防接種することで、感染の拡大を防ぐことができます。予防接種には「個人を守ること」と「社会を守ること」の2つの役割があります。

Q4 どのように接種するのですか？

A4 上腕の筋肉に注射します。また、「コミナティ筋注」(ファイザー社)の場合は3週間の間隔で2回行います。



(2021年3月25日) 日本医師会リーフレットより引用しています。



社会医療法人財団 慈泉会
Emergency Medical Care and Holistic Care

相澤病院 相澤東病院 医療連携センター

Q5 なぜ新型コロナウイルスワクチンは筋肉注射なのですか？

A5 筋肉注射の方がワクチンの成分が素早く吸収されます。筋肉の中は血流が豊富で、免疫に関わる細胞も多く存在するため、ワクチンによる免疫を獲得しやすいのです。

Q7 ワクチン注射で注意することはありますか？

A7 服用している薬の作用によって出血しやすくなっている方や、出血しやすい病気の方は、前もってかかりつけ医に確認をして下さい。そして、必ず接種前に医師や看護師等に伝えて下さい。

Q9 子供も接種できますか？

A9 現在承認されている「コミナティ筋注」(ファイザー社)の対象は16歳以上の方です。小児に対する接種は、今後検討される見通しです。

Q11 重度のアレルギーの既往歴がある場合はどうなりますか？

A11 まずかかりつけ医に相談して下さい。また、接種する医師等が注意深く観察し、必要に応じて速やかに対応を行えるよう、接種前に必ず医師や看護師等に伝えて下さい。

Q13 アナフィラキシーとはどのようなものですか？

A13 アナフィラキシーは薬や食物が身体に入ってから、短時間で見られる全身性のアレルギー反応です。かゆみ・じんま疹、息苦しさ、腹痛など2つ以上の臓器にわたって症状が見られます。その中でも急激な血圧低下や意識障害を伴う場合を「アナフィラキシーショック」と呼びます。これらはすぐに治療する必要があります。

Q15 接種施設を出た後に体調変化に気付いたら誰に相談したら良いですか？

A15 安静にして、接種を受けた医療機関または都道府県や市区町村からの案内に記載された相談窓口にご連絡下さい。

Q6 筋肉注射は痛くありませんか？

A6 痛みの感じ方には個人差があります。ワクチンに含まれる成分によっても異なります。注射したところの腫れや痛みが、接種後しばらく経ってから出ることもあります。

Q8 妊娠中や授乳中の場合はワクチンを接種した法が良いですか？

A8 ワクチン接種対象から除外されてはいませんが、接種する前に必ずかかりつけ医と相談して下さい。

Q10 アレルギーがある場合、ワクチン接種しても大丈夫でしょうか？

A10 アレルギーの原因は様々です。特定の原因が疑われる場合は、ワクチンに含まれる成分との関係について、事前に医師に相談して下さい。ワクチンに含まれる成分以外に対するアレルギーの場合、接種は可能です。

Q12 接種後の体調変化が心配です？

A12 接種後15～30分程度は接種施設で様子をみます。接種直後に、めまい・吐き気・血圧低下などが見られることがあります。また、接種した翌日になって、注射した部位の痛み・腫れ、筋肉や関節の痛み、頭痛、疲労、発熱などが見られることがあります。これらは日常、数日以内におさまります。気になる体調変化は、接種を受けた医療機関や自治体の窓口にご相談して下さい。

Q14 アナフィラキシーが起こるとすれば、接種後いつでしょうか？

A14 米国の報告ではアナフィラキシーが起こった方の90%が接種後30分以内に症状が現れていました。接種を行う施設では、適切な対応が取れる体制を整えています。



(2021年3月25日) 日本医師会リーフレットより引用しています。